
書 評・紹 介

文 浩一 著

『朝鮮民主主義人民共和国の人口変動』

人口学から読み解く朝鮮社会主義

明石書店, 2011年9月, 411p

各種情報が極端に少なく、公表される統計資料も皆無に近い北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に関する研究は多くの困難をとまなうものである。北朝鮮の人口に関しても同じ事情から研究書物が少ないのが現状であろう。幸いなことに1993年と2008年に国連人口基金（UNFPA）の援助のもとで北朝鮮では二回の人口センサスが行われた。

本書は、全4部、10章から構成されている。序章では、北朝鮮の人口変動の特徴、資料状況と既存研究の概要および本書の方法論について概説的に述べられている。類をみない劇的な人口変動を経てきている北朝鮮の人口変動の特徴として、朝鮮戦争、出生転換、飢饉の発生、体位の成長が顕著に観察されないことなどが挙げられている。

第Ⅰ部（「人口学研究と統計調査事情」）では、北朝鮮における人口学研究と人口統計調査制度の変遷過程が紹介されている。第1章（「朝鮮社会主義と人口学」）によれば、1980年代後半から国連人口基金との協力が始まり人口学研究がスタートしているが、これは1980年代初め中国の改革・開放初期の状況に似ている。第2章（「人口調査体系」）では、登記調査統計とセンサス統計から人口統計調査の実態と問題点が明らかにされている。

第Ⅱ部（「出生の諸問題」）は、第3章（「出生転換」）と第4章（「男児選好意識の低下とその要因」）からなっている。第3章では、出生転換の時期と要因について、政策当局者の発言録から「非数量データ」を作成し、結婚年齢や就業状態など出生に影響を及ぼす変数が取り上げられ、分析が試みられている。第4章では、男児選好問題が論じられているが、北朝鮮では男児選好がそれほど強く観察されない。かつて出生性比が高かった韓国とは対照的である。「死亡の諸問題」が扱われている第Ⅲ部の第5章（「生命表」）ではセンサス統計から北朝鮮オリジナルの生命表が作成されており、またモデル生命表との比較が行われている。そして、第6章（「体位の成長鈍化とその要因」）では、脱北者から集計された体位（身長や体重）データや文献記述などに基づく体位の分析が試みられ、栄養状態、死亡と罹患、母体の健康状態などからその要因が追究される。

第Ⅳ部（「人口推計」）では、「平時の人口推計」と「飢饉推計」が行われている。第7章（「平時の人口推計（1953～1993）」）は朝鮮戦争後の1953年から飢饉以前の1993年までの人口について逆進推計が行われ、男女別人口、普通出生率、普通死亡率、平均寿命などの推計結果が示されている。一方、第8章（「飢饉推計（1994～2000年）」）は飢饉の規模と構造に関する分析である。1990年代に発生した北朝鮮の飢饉規模について、これまでの各種推計結果は数十万人から数百万人とばらつきが大きい。本章で推計された飢饉の規模（1994～2000年）は33万6,000人程度という結果になっている。そして、飢饉の影響は、乳幼児や高齢層だけでなく全年齢層に及んだこと、穀倉地帯では飢饉の被害が比較的少なかったことが指摘されている。

本書の大きな特徴の一つは、著者の数回にわたる北朝鮮への現地訪問で得られた情報が多分に用いられていることである。また、数量統計ばかりでなく、文献記述も多く利用されている。「付表」には、北朝鮮の公表人口統計資料が載せられており、「資料」には『金日成著作集』からの人口問題関連部分の抜粋（1970～1980年）、最後の「付録」には、2008年の第二回人口センサスの概要、調査票、主要結果などの内容が掲載されている。

北朝鮮の人口や人口研究に関心のある読者には必読の一冊である。

（尹 豪）